

## オイストラフへの手紙

中村 龍介

私の得意の外国語はロシア語（だった）。一九五九年、一次志望大学の受験に失敗、公立二期校の神戸外国語大学・ロシア学科に入学した。ロシア語を選んだのは、英語なら誰でもできる。人の知らない外国語は自分の武器になるという父のアドバイスであった。が、私は、先ずローマ字を裏返したような文字をもつ、奇妙で難解な言語に少なからぬ違和感をもった。更に、文法にまで進むにつれ、自分は間違った道に入り込んだに違いないと、確信に近いものを感じるようになった。単語の格変化が凄い。ドイツ語でも名詞や代名詞は四格の変化をするが、ロシア語は、単数、複数とも六格の変化をする。数詞になると信じられないほど多くの規則がある。

例えば、一九五九の前に前置詞を置く場合、英語なら *in* を付けると「一九五九年に」、*before* を付けると「一九五九年前に」という意味になる。ところが、ロシア語は遙かに意地悪だ。「*in*」に相当する前置詞を置くと、その後にくる一九五九の数詞は、四つの数字それぞれが、前置格（第六格）に変化する。「*before*」に相当する前置詞を置くと、その後の四つの数字全部が生格（第二格）に変化する。自分の名前さえもが、「ナカムラ・ナカムルイ・ナカムレ・ナカムルウ・ナカムロイ・ナカムレエ」と変化する。

「こんなもの、やってられるか！」

一クラス三十人の新入生たちの恐らく二十五人までがそう思ったに違いない。この段階で約半数が脱落する。私もその一人だった。

が、その週末だったか、その次だったか、気分転換に観た一本のロシア映画が私の先入観を大きく変えた。「鶴は飛んで行く」というタイトルだった。カンヌだったか、英国だったか、どこかの国際映画祭でグランプリを取ったという作品だ。戦争に出ていく青年とその恋人のロマンスをテーマにした映画。とても良かった。ストーリーの展開も面白かったが、そんなことよりも、タチアナ・サモイロワが演ずるヒロイン・ヴェロニカの喋るロシア語の響きにすっかり魅せられた。また、この映画の前に上映された、十分ほどの観光PRフィルム、レニングラード（当時）の「ネバ川」を紹介する短編で、男の声優が語り掛けるナレーションの素晴らしさは私を圧倒した。

「ロシア語って、こんなに美しい言葉だったのか！」 私もロシア語を喋れるようになりたい。それが切実なる願望になった。

とはいえ、大学で学習する複雑怪奇な文法に再挑戦する気にはならない。それなら

会話から入ろう。まず、会話の先生捜しに入った。神戸にはたくさん白系ロシア人と呼ばれる人たちがいた。彼らは、一九一七年のロシア革命で祖国を追われて日本に逃れてきた人たちだ。一部の人は、モロゾフのように菓子作りに成功したが、大半はホテルのボーイやナイトクラブの門番などの仕事を見つけ、貧しい生活を強いられていた。かれらの殆どが無国籍で、日本の福祉政策の枠外に居た。唯一、彼らの面倒を見ていた行政は兵庫県警外事課であった。外事課では公安の仕事の一環として、神戸在住の外国人の現状をよく調べていた。特に、外事課二係は白系ロシア人を担当し、非公式に彼らの一時的な仕事の斡旋まで手掛けていた。

週明けの月曜日、私は何のアポイントもなく、兵庫県警外事課二係を訪ね、一人のロシア人女性を紹介してもらった。その足で、教えられた場所に行ってみた。

神戸・三宮の山手、山本通りの一角に「白系露国人組合」と表札の架った異人館があり、その建物の横にある物置のようなバラックに、その女性は殆ど寝たきりで、ボランティアの名前を、マリア・マカロヴァという。高齢の彼女は殆ど寝たきりで、ボランティアの日本人が身の回りの世話をしているようだった。

「私はロシア語が喋れるようになりたい。是非、ロシア語を教えてください」

日本語が通じるかどうか分からないので、英語でお願いした。

「オーケー。ロシアゴ・ベンキョウね」

マカロヴァさんは片言の日本語で答えた。授業料は一時間百円でもいいという。私のポケットマネーで何とかなる。二つ返事で了解した。

翌週から、週二回・二時間授業を受けることになった。マカロヴァさんも今でいう独居老人の生活が寂しかったのだろう。ベッドの上の壁に掛けられたカレンダーには私の来る日が○印で示されていた。

一年後、ロシア語の習得に関して、私は自分の中で確かな感触を掴んだ。クラスのロシア語会話の時間では、ロシア人の先生と会話らしきコミュニケーションができる一握りの学生の中に自分が居ることが誇らしかった。二年目、三年目に入ると、私は他流試合に出かける剣士のように、ソ連の若者たちとも会話を交わすようになった。神戸は横浜と並んで、日本の海の玄関口だ。神戸港には木材や石炭を積んだソ連の貨物船が頻繁に入ってきた。そんな時、岸壁から船のデッキを見上げて大声で叫ぶと、それに気付いた船員が、手を振って応えてくれた。そして、多くの場合「上つてこい」と、ジェスチャーで合図する。私は躊躇わずにタラップを昇りデッキに出る。

船上では、ロシア語を喋る日本人が珍しいのだろう。たくさん出てきて、あちこちから質問が出る。その内に、食堂に案内され、チャイ（紅茶）が出る。運がよければ、

ボルシチが出てくることもある。こうした他流試合で経験する、ソ連の若者たちとの交流で私のロシア語の世界はかなり広がっていったように思う。

一九六二年、第三学年に上がると、友人たちは就活に本気になる。が、私はあまり興味がなかった。貿易商社に入って日ソ貿易に従事する。ロシア語を学ぶ者にとつて本来の進路かもしれない。だが、私には是非ともやりたいことが他にあった。それは、オリンピックの通訳。私が大学を卒業する一九六四年に「東京オリンピック」がある。まるで、私が卒業するのを待ち受けているかのようなタイミングだ。

先ずは、東京に定住する必要がある。両親に相談し、東京のH大学の大学院を受験することにした。難関校だが、私には勝算があった。受験科目は三科目だ。経済学、経営学、会計学から選択、英語及び、第二外国語（独、仏、西、露から選択）とある。経営学、英語、ロシア語で受験することにした。経営学だけを補強すればよい。後の二科目では他に負けない自信があった。

一九六三年の夏休み、私は経営学の参考書をしこたま買い込み、母の遠縁に当たる丹波の山奥にあるお寺に泊まり込んで真面目に勉強した。その甲斐あつてか、目標の大学院に合格した。この時は、父の予言通り、ロシア語が私のシャープな武器として大いに活躍したことを実感した。

その年の冬、東京に出て、オリンピック通訳の試験とガイド（通訳案内業）の国家試験を受けて、幸い、どちらも合格した。そして翌年の春、神戸外大を卒業し、東京での新生活が始まった。

親元から独立した生活は楽しかった。自由を謳歌したといえる。大学院での講義も面白かった。ロシア語の通訳としては、この年の九月から八王子選手村勤務となり、十月一杯まで休みなしで選手村に通った。通訳の待遇は抜群だった。当時、フランク永井の「一万三千八百円」という歌が流行っていたが、これは大学卒の初任給だった。その御時世に通訳の待遇は日給三千円だった。二カ月の勤務で手にした報酬は、何と、十八万円！学卒の一年分の給与を上回る。ものすごく嬉しかった。私のロシア語に大金が支払われたのだ。この資金を元手に親から援助を貰って、ソ連、ヨーロッパを旅行した。最後の学生生活を楽しんだお陰で、二年で終了できる修士課程に三年かかってしまったが、後悔はなかった。

一九六六年春、私は山口県に本社のあるU社に就職した。日ソ貿易とは関係のないメーカーだ。この時点で、ロシア語とは、残念ながら、縁切りしたつもりだった。が、捨てる神あれば拾う神あり。

私が入社した時、U社には三人の副社長が居た。その中の一人、T副社長は大の

クラシック好き。U市に好楽協会という組織を作り、T氏がその会長を務めていた。U市は元々音楽には造詣が深い。U社が中心となつて、一九三〇年代に市の中心部に、音響効果が日本でも五本の指に入ると言われるコンサートホールを建設し、世界各国から著名な音楽家を招いて演奏会を開催していた。この建物はU社初代社長の名前を取つて「渡辺翁記念会館」といい、国の重要文化財に指定されている。

T氏の実家は音楽一家、著名な音楽評論家、属啓成（さつか・けいせい）氏はT氏の義弟に当たる。従つて、T副社長も社業よりも好楽協会の仕事に熱が入っていた。入社後、U市本社に配属されて半年ほど経つたある日、私はT副社長から呼び出しを受けた。新入社員が副社長室に呼ばれるのは特別のことだ。緊張して入室した。

「君が中村くんか。ま、座り給え」

T副社長のデスクの前に置かれたパイプ椅子に腰を下ろした。

「ロシア語に堪能だと聞いたが、仕事に使っているの？」

「いえ、まだその機会はありません」

「外国語というのは、使わないと忘れるんじゃないのかな」

「そう言われます。ですが、今のところは未だ忘れていません」

「それは結構。ひとつお願いがあるんだが、ある人にロシア語で手紙を書いてほしい。書く相手は、ダビッド・オイストラフというヴァイオリニストだ。知ってるか？」

「もちろんです。私はクラシックファンですから。オイストラフと言えば、世界一のヴァイオリン奏者です。」

「そうか。それなら話が速い。これが、日本語の原稿だ。これをロシア語に翻訳してくれないか」

こうして頂戴した日本語の手紙を一週間ほどかけてロシア語に翻訳した。日本語の原稿に書かれていた中身は、過去にオイストラフ氏が渡邊翁記念会館訪れ、演奏してくれたことへのお礼と、近い将来、ヴァイオリンの名曲特集を企画するので、是非、また来訪願いたい、といった内容だった。恐らく、この翻訳の仕事が、入社後最初の中身のある仕事だったように思う。そして、オイストラフ氏は来日予定の前年十月にアムステルダムで演奏中に心臓まひで急死してしまった。

だが、その後、仕事でロシア語を使うチャンスはほとんどなく、私の自慢の武器は錆びついていった。あの時のオイストラフ宛の手紙が、恐らく、私のロシア語学習の集大成だったのかもしれない。

